

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32617

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720113

研究課題名(和文) 韻文および散文の『メノロギウム』：暦学教育との関連から

研究課題名(英文) The Prose and the Verse Menologium with Special Reference to Late Anglo-Saxon Computistical Education

研究代表者

唐澤 一友 (Karasawa, Kazutomo)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：00347288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、韻文および散文のMenologiumのエディションを完成させること、両作品の比較研究を通じ、両者の関係性を明らかにすること、暦学教育と関連して書かれた当時の文献との比較研究を通じ、これらの作品の性質を明らかにし、同時に両作品の文学史上・文化史上の位置付けを明らかにすること、の三点を目標としたものであった。については、計画していたようなエディションを完成させることが出来た。については研究論文および学会における口頭発表の形でその成果を発表することが出来た。

研究成果の概要(英文)：The following are the main purposes of this project: 1) preparing a full-fledged edition of the verse and the prose Menologium; 2) comparing these two works with each other and elucidating their relationship; 3) comparing these two works with other contemporary computistical writings and elucidating the nature of these works as well as their positions in the literary and cultural history. As regards 1), I have finished preparing the edition with a full introduction, the text and its English translation, commentary, glossary and several appendices. As regards 2) and 3), I have published several articles and also read two papers at conferences.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アングロ・サクソン学 暦学

1. 研究開始当初の背景

古英詩 *Menologium* および散文の *Menologium* は、アングロ・サクソン時代の「自然科学」、その中でも特に暦学と関わる教育と密接に関連する作品であり、この分野における当時の知識や教育の様子、さらには当時の時間感覚がよく反映された作品であるということを、研究期間以前の研究では論じてきた。

このようなことを論じるに当たり、研究期間以前においては、上記の作品それ自体の内部に手がかりを求めた研究を中心に行ってきたため、結果として、同時代の暦学関連の文献との比較研究という側面が手薄であった。

本研究においては、過去の研究を発展させるべく、特にこれらの作品と、同時代の暦学関連の古英語およびラテン語の文献との比較研究をもとに、韻文と散文の *Menologium* が当時の暦学教育の中でいかなる位置付けのものであったのかを明らかにすることを一つの目的としたものであった。

これらの作品については、欧米においても研究はあまり進んでおらず、詳しい研究に基づく本格的なエディションも未だ出版されておらず、これらがいかなる性質の作品であるのかという最も基礎的なことすら詳しくは知られていないというのが現状である。特に韻文の *Menologium* に関しては、アングロ・サクソン時代の暦学との関連から研究されたことは皆無に等しく、その意味で、新しい視点からこの作品を見ようとするものであると言える。このように、本研究は従来あまり注目されてこなかった作品・分野に新たな光を当てようと試みるものであり、最終的には、初の本格的な研究・エディションを出版し、研究成果を国内外の研究者に発信することを視野に入れたものであった。

2. 研究の目的

研究期間に内に行いたいこととして、当初掲げたのは、以下の①～③であった。

① 韻文および散文の *Menologium* のエディションを完成させる。

② 両作品の比較研究を通じ、両者の関係性を明らかにする。

③ 暦学教育と関連して書かれた当時の文献との比較研究を通じ、これらの作品の性質を明らかにし、同時に両作品の文学史上・文化史上の位置付けを明らかにする。

①については、過去の研究により、テキスト、注、グロッサリー等に関しては既にある程度作業が進んでいたが、本研究では、過去の成果を再点検し、内容を一層充実させるべく努力するとともに、特に、項目②、③の研

究成果をはじめとして、本エディションに付属する解説の部分の完成させることを目的とした。これらの作品が文学史上のいかなる位置を占めるいかなる性質の作品であるかという根本的な問題から、これらの作品を含む写本の問題、さらには言語、文体、構造、内容、文化的背景等についての総合的な解説とすることを目的として定めた。

② および③はいずれもこれらの作品の文学史上、文化史上の位置付けを明らかにしようとするもので、項目①における「解説」の重要な部分を占めるものである。②はいわばミクロの視点から、*Menologium* という同じタイトルを共有する韻文と散文の作品の関係性について、それぞれの作品の特徴やその他の詳細を比較しながら明らかにしようとするものであった。これに対し、③はより大きな視点から、当時の学問や教育という知的文化の中における両作品の位置付けを明らかにしようとするものであった。

3. 研究の方法

本研究は、これまでの研究成果の上に発展させるものであり、少なくともその基礎部分は既に出来上がっていたため、引き続き資料収集や実際の文献の研究、情報の分析などを行うとともに、初年度から研究成果を論文としてまとめる作業をも並行して行うことを予定していた。

また、本研究で初めて本格的に取り組んだ課題である、アングロ・サクソン時代の写本に残る暦学関連文献の調査・研究、およびこれと *Menologium* との比較については、写本の現地調査が必要不可欠であることから、参照する必要のある写本の所蔵される図書館（主に大英図書館、Bodleian Library, Parker Library）を訪ね、現地調査を複数回にわたり行い、その成果を踏まえた論文も順次執筆することを予定していた。

研究期間中のこれらの作業を積み重ねていくことにより、最終的に、上述の「研究の目的」の中の項目①～③に示した目標を達成するというのが当初計画した研究の主な方法であった。

平成 22 年度は、特に「研究の目的」に示した②の課題に取り組む計画であった。過去の写本調査を基礎にしながら、新たな資料等も収集しつつ、韻文および散文の *Menologium* の比較研究を行い、その成果を論文としてまとめ、これを、Bryan Carella と László Sándor Chardonnens の編集するこの分野と関連の深いテーマの論文を集めた論文集 *Anglo-Saxon Secular Learning in the Vernacular* (Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik シリーズから出版が予定されている) に投稿することを予定していた。

23 年度および 24 年度には、主に上記「研究の目的」の中の③に示した課題に取り組むことを予定していた。23 年度当初は 22 年度

の写本の实地調査の結果に基づき作業を進めるが、夏季には再び写本の实地調査を行い、それ以降はこの結果をも踏まえた分析・考察を行うことを予定していた。そして、24年度末までには实地調査に基づくデータの分析・検証を終え、結果を論文の形にまとめ、公表することを予定していた。

最終年度である25年度には、本研究以前に行った研究（を本研究期間中に改訂したもの）、22年度の②に関する研究、および23～24年度の③に関する研究を統合する形で文章にまとめ、主に上記「研究の目的」の中の①に示した課題を完結させることを目標としていた。

24年度までは②と③の研究成果を別々の論文としてまとめるが、最終年度においては、これらの問題の間にある相互関係についても考察し、その成果を①の一部に組み込む考えであった。また、最終年度にはエディションを完成させるため、散文および韻文の *Menologium* の写本を今一度詳しく調査しなおし、見落としや間違い等がないか最終的な確認も行う予定であった。

以上のような過程により、「研究の目的」を達成しようとするのが本研究の主な方法であった。

4. 研究成果

「研究の目的」に述べたような古英詩 *Menologium* および散文の *Menologium* の総合的な研究に基づくエディションを完成させることが最終的な目的であったが、これらの作品および類似作品に関する4年間に亘る研究および英国における写本の調査等を経て、この目的を達成することが出来、計画していたようなエディションを完成させることが出来た。研究期間内にこれを出版するまでには至らなかったが、研究期間終了後に、出来上がったものを英国の出版社に送り、現在、出版に関する交渉等を行っているところである。

このエディションは、全体で約250ページ（約9万語）にわたるもので、写本や写本のコンテクスト、散文の *Menologium*、ラテン語の *Metrical Calendars*、および古アイルランド語の *Calendar Poems* との比較、詩の構造、内容、扱われている祝日、詩の目的、散文と韻文の *Menologium* の関係性、詩に用いられた言語や韻律の特徴、詩の作られた場所や時代などについての解説、韻文の *Menologium* の写本に基づくテキストおよびその英訳、これに対する *textual notes*, *commentary*, *glossary*, また、補遺として散文の *Menologium*, *Metrical Calendar of York*, 古アイルランド語の *Félire Adamnáin* および *Enlaith betha* それぞれのテキストと英訳、アングロ・サクソン時代に作成された27のカレンダーにおける重要な祝日、至点（夏至・冬至）、分点（春分・秋分）の日付のリスト、および古英語文献と韻文の *Menologium*

における月の名称の使用についての論考を含むものである。

これに加え、このエディション作成に向けての研究の中で、韻文の *Menologium* と散文の *Menologium* の関係性に関する研究、2つのヴァリエントが存在する散文の *Menologium* のパラレル・テキストやこれに対する解説、*textual notes* および *commentary*、および *Menologium* と密接に関わるアングロ・サクソン時代のカレンダー、ラテン語による *metrical calendars*, *Maxims II*, *Anglo-Saxon Chronicle* のC写本に関する論考を順次論文や口頭発表の形で随時発表することが出来た。そのうちの一点（韻文および散文の *Menologium* の関係性に関する研究）は伝統あり国際的に流通するシリーズの中の一冊として出版された書籍に収録され、国際的に成果を発表することが出来た。また、別の一点（*Anglo-Saxon Chronicle* のC写本や *Maxims II* と関連する論考）は、日本で最も大規模な中世英文学関連の学会において口頭発表し、成果を同じ分野で研究する日本の専門家の多くに公表することが出来た。これらに加え、まだ審査中ではあるが、古アイルランド語の類似作品との関係性についての論考もまとめ、海外の専門誌に投稿中である。また、研究期間終了後の学会ではあるが、本研究の成果を踏まえ、平成26年度の8月にロンドンで行われる国際学会において、“*High Feasts in Late Anglo-Saxon England: Contexts for the Menologium*” というタイトルで、アングロ・サクソン時代のカレンダーと韻文および散文の *Menologium* の関係性についての研究発表を行うことも決まっている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①唐澤一友「Anglo-Saxon Calendars 研究 重要な固定祝日を中心に」『英米文学』、査読無、48巻、2013年、147-173ページ、<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/33551/reb048-06-karasawa.pdf>
- ②唐澤一友「ラテン語の *metrical calendars* と古英詩 *Menologium* 付 *Metrical Calendar of York*」、査読無、『英米文学』47巻、2012年、47-77ページ、<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/33149/reb047-03-karasawa.pdf>
- ③Kazutomo Karasawa, “Two Variants of the Prose *Menologium*: A Parallel Text”, *Asterisk*, 査読有、20巻2号、2011年、28-46ページ。

[学会発表] (計2件)

①唐澤一友「Anglo-Saxon Chronicle の C 写本における *Menologium* および *Maxims II* の役割」第 29 回 日本中世英語英文学会全国大会、2013 年 11 月 30 日、愛知学院大学。

②唐澤一友「Anglo-Saxon Chronicle の C 写本について」第 82 回 チョーサー研究、2013 年 1 月 26 日、駒澤大学。

[図書] (計2件)

① Kazutomo Karasawa, *The Old English Calendar Poem Menologium* (出版交渉中。2015 年刊行予定。)

② Kazutomo Karasawa, “The Prose and the Verse *Menologium* in the Tradition of Elementary Computistical Education in Late Anglo-Saxon England,” in L. S. Chardonnens and B. Carella, ed., *Secular Learning in Anglo-Saxon England*, *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik* 69 (Amsterdam: Rodopi, 2012), pp. 119-43.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

唐澤 一友 (Karasawa, Kazutomo)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：00347288

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：